

# 自閉スペクトラム症のある子どもの「遊びの指導」

¶前号の続きからですが、特に自閉スペクトラム症のある子どもについての「遊び」は感覚の過敏や鈍麻といった障害特性に起因する「遊びの失敗」や「誤学習」の起きやすさや、「遊びの場」という条件刺激の数の調整がしにくい環境になりやすいという環境面の特徴から教師側のねらいが達成されるような遊びになりにくい傾向にあります（幼稚部教育要領内では「遊び自体の充実」が「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」につながるという記載ですが、ASD児は自然学習の拡がりにくさを持つ子も少なくありません）。そこで、今回はタイトルの「自閉スペクトラム症のある子どもの「遊びの指導」について考えてみます。

## -「遊び」や「余暇」とは何か?-

¶そもそも、「遊び」や「余暇」とは何か？という所から、話を始めて行きます。定義から紐解くと、「遊び」や「余暇」は、

・仕事でないこと　・自分の時間を勝手に使うこと　・本人が楽しんで取り組むもの

となります。もう一步踏み込んで、行動科学的にこのことを理解すると

・活動そのものが、次回もその活動に自発的に取り組むことを強化するものであること

と言えます。少し、自分に引きつけて考えてみると分かりやすいと思うのですが、アタの「遊び」や「余暇活動」は何でしょうか？例えば「ランニング」が余暇活動の場合には、ランニングそのものが「汗をかくとストレス発散になる」とか「ダイエットにつながっている」とか「健康の保持につながっている」とかという強化子に直接つながりながら、「ランニング自体が楽しい」というものになっていきます。これを行動科学的に言い直すと、

「健康的になる」とか「痩せる」といった社会性強化子（般性強化刺激）が、「ランニング」という活動性強化子と対提示されることで社会性強化子の強化価が上がる

となります。

行動的に言い直す・捉え直すことで遊びの指導の教育効果を評価できるようにする

¶ASDのある子どもの遊びは、教育現場でふわっと言われている「遊びの効果」の「行動科学的な言い直し・捉え直し」が一つのポイントになります。例えば、

・たくさん遊ぶことで豊かな子になる。

→「多様な活動性強化子を積極的に提示することで行動レパートリー数を増加させられる」

・コミュニケーションが上手になる。

→「社会的に強化されやすいコミュニケーション行動に活動性強化子を随伴させることで強化することができ、その生起頻度を増加させることができる」

¶こういった捉え直し・言い直しを行った上で、前号の「感覚の過敏」や「言語発達の道筋の違い」などといったASD特有のかかわり方に留意して、遊びの指導に取り組むと、今までよりも、より効果的に遊びの指導が形成されていくかもしれません。

定型発達を辿る人の「やりたいこと」としての「遊び」とASDのある子どもの「スケジュールに組みこまれた遊び」について

『冒頭の定義に挙げたように、定義的な側面から言うと「遊び」は

- ・仕事でないこと
- ・自分の時間を勝手に使うこと
- ・本人が楽しんで取り組むもの

…となります。ASDのある子どもの中には「フリーな時間になると途端に不安になってしまう」とか、「フリーな時間になると「突然的な感覚刺激に意識をハイジャックされやすくなってしまう」といった、「スケジュールが連続している方が、世界が安定して豊かに過ごせる」子どもが多く居ます（だからこそスケジュールがあるんですね）。そういった子どもについては、定型発達の原義的な「遊び」からは少し離れますが、「遊びの指導」をフリーな時間と環境の中で「やりたいこと」をやれる時間として捉えるのではなく、「遊び自体がスケジューリングされ、各自の感覚の特性に応じて物理的な環境づくりがされた中でやらなければならないこととして遊びの見た目を持った活動を入れ込む」という発想で遊びを捉え直していくと、ASDのある人の世界に寄り添った遊びになっていきます。

『そういった意味では、先生が各自の特性に応じた遊びを作り、それをスケジューリングしていく「遊びの指導」というのが、ASDのある児童にとっての「遊びの指導」の一つの形として考えられるのかと思われます。